

2014年3月29日

愛媛新聞

基準地震動を解く

伊方原発

四国電力伊方原発の基準地震動570μは、調査に基づいて活断層の位置や形状で原発に最も影響が大きくなるよう計算した「断層モデル」と（小規模な地震観測記録から大規模地震の波形を合成してつくり出す）経験的な方法で総合的に決めている。

基準地震動は計算で出した一番大きい揺れの値のよつに思われることがあるが、そのではない。（四電が原子力規制委員会に提出した）資料を見る限り、570μはじやないといけないという根拠はなく、もつちよつと大きくてもいい。
地震動評価の計算は新

3 京都大名譽教授 入倉 孝次郎氏



いりくら・こうじろう 68年京都大大学院理学研究科・地球物理学専攻博士課程中退。同大副学長や日本地震学会会長などを歴任。01～12年、内閣府原子力安全委員会専門委員。強震動地震学。73歳。

3/29 余裕ある設計 確認重要

がずれた時のエネルギー（を示す）応力降下量だ。評価に最も影響を与える平均像を求めるもの。平値で、（四電が不確かさを考慮して）1.5倍に振り回されているが、これに明確な根拠はない。あ。使って計算方法を提案してきたが、これは地震の平均像を求めたもの。平均からずれた地震はいくらかでもあり、観測そのものが間違っていることもあ。し論文を参考にしており、恣意（しい）的な部分はある（しい）的な部分はある。570μはあくまで目安。基準地震動はできるだけ余裕を持って決めた方がいいので大変だろう。しかし、基準地震動を一つ弱く（耐性評価）で、それほど余裕がなかった。これは重要なポイントで、規制委の審査できちんと示されるだろう。

570μのままにして、それを多少超す地震が来たとしてもすぐ壊れることはないと思う。580μ（宮城県）でも、東日本大震災のときに800μを超す地震動だったが耐えられた。伊方でもそれくらいの余裕は持って造られているはず。基準地震動以上の揺れでも大丈夫なよつに余裕のある設計が行われるべき舞（聞き手・藤中潤、阪和